河内長野市遺跡調査会報XXⅢ

烏帽子形城跡

２０００年３月

河内長野市遺跡調査会

序　　文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、市域を高野街道を初めとする街道が通り、南河内における交通の要衝として発展してきた街です。このため、市内には金剛寺、観心寺などの寺社に代表される重要文化財や、多くの埋蔵文化財が残されています。

このような河内長野市も、大阪市内への通勤圏に位置しているため、近年になって住宅都市として急速に開発が進んでいます。

開発がもたらす影響は自然や文化財にとって大きなものです。とくに埋蔵文化財にとっては直接的に関わってくるものとして大きな問題であります。

開発を必要とすると同時に、失われていく遺跡に託された先人達のメッセージを現在の市民、さらには未来の市民へと伝えていかなければなりません。

本書は河内長野市に存在する遺跡の発掘調査の成果を収録しています。先人達が残したメッセージの一部でも理解していただければ幸いです。

発掘調査に協力していただきました施主の方々の埋蔵文化財への深い御理解に末尾ながら謝意を表すものです。

平成12年３月

河内長野市遺跡調査会
理事長　福　田　弘　行

例　　言

1．本書は平成10年度に河内長野市遺跡調査会が河内長野市から委託を受けた烏帽子形城跡（ＥＢＳ98－１）の発掘調査報告書である。調査にかかる費用は、河内長野市が負担した。

2．調査は河内長野市教育委員会教育部社会教育課主幹尾谷雅彦、同課文化財保護係鳥羽正剛・太田宏明を担当者として実施し、内業調査は河内長野市立ふれあい考古館館長中西和子が補佐した。

3．調査にかかる事務は河内長野市遺跡調査会事務局長大塚幸男（本市教育委員会教育部社会教育課課長補佐兼務）が主担した。

4．本書の執筆・編集は太田が行い、編集は松尾和代がこれを補佐した。文責については太田が負うものである。

5．発掘調査及び内業整理については下記の方々の参加を得た。（敬称略）

　阿部園子・喜多順子・杉本祐子・田川富子・辻宏子・中村幸子・藤原哲（ふれあい考古館館員）・枡本裕子・牟田口京子

6．発掘調査については下記の方々の協力を得た。記して感謝する。（敬称略・順不同）

　株式会社島田組・株式会社かんこう・喜多町会・上田町会・池田貴則・中村浩・藤岡英礼・西山昌孝・犬木努・河内一浩・武村英治

7．写真撮影は、遺構については太田、遺物については中西が行った。

8．本調査の記録はスライドフィルムなどでも保管されており、広く一般の方々に活用されることを望むものである。

凡　　例

1．本書に記載されている標高はＴＰを基準としている。

2．土色は『新版標準土色帖』による。

3．平面測量は国土座標第Ⅵ系による５ｍメッシュを基準に実施した。

4．図中の北は座標北である。

5．本書の遺構名は下記の略記号を用いた。

　ＳＤ…溝　　ＳＦ…道路状遺構　　ＳＫ…土坑

6．遺構実測図の縮尺は1/40・1/80・1/100・1/150・1/300である。

7．遺物実測図の縮尺は、土器1/4・瓦1/4・ミニチュア土製品2/3・銅銭原寸とした。

8．陶磁器の断面は黒塗り、土師質土器の断面は白抜き、瓦の断面は斜線である。

9．遺物番号と写真図版の番号は一致する。

10．文中の堺擂鉢の型式分類は白神典之氏の編年(註1)、炮烙の型式分類は難波洋三氏の編年(註2)、肥前系陶磁の型式分類は大橋康二氏の編年(註3)に基づくものである。また、器種に関しては井汲隆夫氏の分類(註4)に準拠した。

（註１）白神典之　1984「堺擂鉢について」『堺環濠都市遺跡（SKT79）発掘調査報告』堺市教育委員会
（註２）難波洋三　1992「徳川氏大阪城期の炮烙」『難波宮跡の研究　第九』大阪市文化財協会
（註３）大橋康二　1989『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
（註４）井汲隆夫　1992「やきもの分類表」『内藤町遺跡』東京都建設局・新宿区内藤町遺跡調査会

目　　次

序文
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
図版目次
付図目次
第１章　はじめに…… 1
　第１節　位置と環境…… 1
　第２節　既往の調査…… 4
　第３節　調査に至る経緯…… 4
　第４節　調査の方法…… 6
第２章　調査の結果…… 9
　第１節　概要…… 9
　第２節　基本層序…… 9
　第３節　地形…… 9
　第４節　遺構と遺物…… 10
　第５節　まとめ…… 21

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図…… 1
第２図　河内長野市遺跡分布図(1/40000) …… 2
第３図　既往の調査区位置図(1/5000)…… 5
第４図　調査区位置図(1/5000)…… 6
第５図　ＳＤ１～４遺構断面実測図(1/40)…… 10
第６図　第１調査区地形図(1/300) …… 11～12
第７図　第１調査区土層断面実測図(1/80)…… 13～14
第８図　ＳＤ２・６・11出土遺物実測図…… 15
第９図　ＳＤ15遺構断面実測図(1/40)…… 15
第10図　ＳＦ１遺構実測図(1/80)…… 15
第11図　ＳＫ１～３遺構断面実測図(1/40)…… 16
第12図　ＳＫ４・６遺構断面実測図(1/40)…… 16
第13図　ＳＫ５出土遺物実測図…… 17
第14図　柱穴群平面図(1/100) …… 17
第15図　第１調査区包含層出土遺物実測図(１)…… 19
第16図　第１調査区包含層出土遺物実測図(２)…… 20

表　目　次

第１表　河内長野市遺跡地名表…… 3

図　版　目　次

図版１　遺構　第１調査区調査前景(北から)、第１調査区北部調査前景(北から)
図版２　遺構　第１調査区調査前景(南から)、第１調査区南西部調査前景(南から)
図版３　遺構　第１調査区全景(上から)
図版４　遺構　第１調査区全景(北から)、第１調査区全景(南から)
図版５　遺構　第１調査区西斜面(南から)、第１調査区全景(北から)
図版６　遺構　ＳＤ２・３(南から)、ＳＤ14(南から)
図版７　遺構　ＳＦ１(上から)、柱穴群(上から)
図版８　遺構　第２調査区(北から)、第３調査区(北から)、第４調査区(北から)

図版９　遺構　第５調査区(東から)、第６調査区(西から)
図版10　遺物　ＳＤ２(３)、ＳＤ６(２)、ＳＤ11(１)、ＳＫ５(４)、包含層(６～11、13～28、30～38、40～44)

付　図　目　次

付図１　第１調査区地形図(1/300・1/150)
付図２　第１調査区遺構配置図(1/100)

第１章　はじめに

第１節　位置と環境

当該遺跡は、行政的には河内長野市の北部に位置する喜多町と上田町にまたがって所在する。

当該遺跡の地理的環境を述べると、まず遺跡が立地している標高182mの烏帽子形山は金剛・葛城山系から北に派生する尾根であることがあげられる。また尾根の東側は天見川沿の中・低位段丘が形成されており、西側は石川沿に広がる中・低位段丘が形成されていて、三方は開けている。

歴史的環境を述べると、先述の天見川沿の中・低位段丘及び、石川沿の中・低位段丘を中心にそれぞれ特徴ある遺跡が分布している。

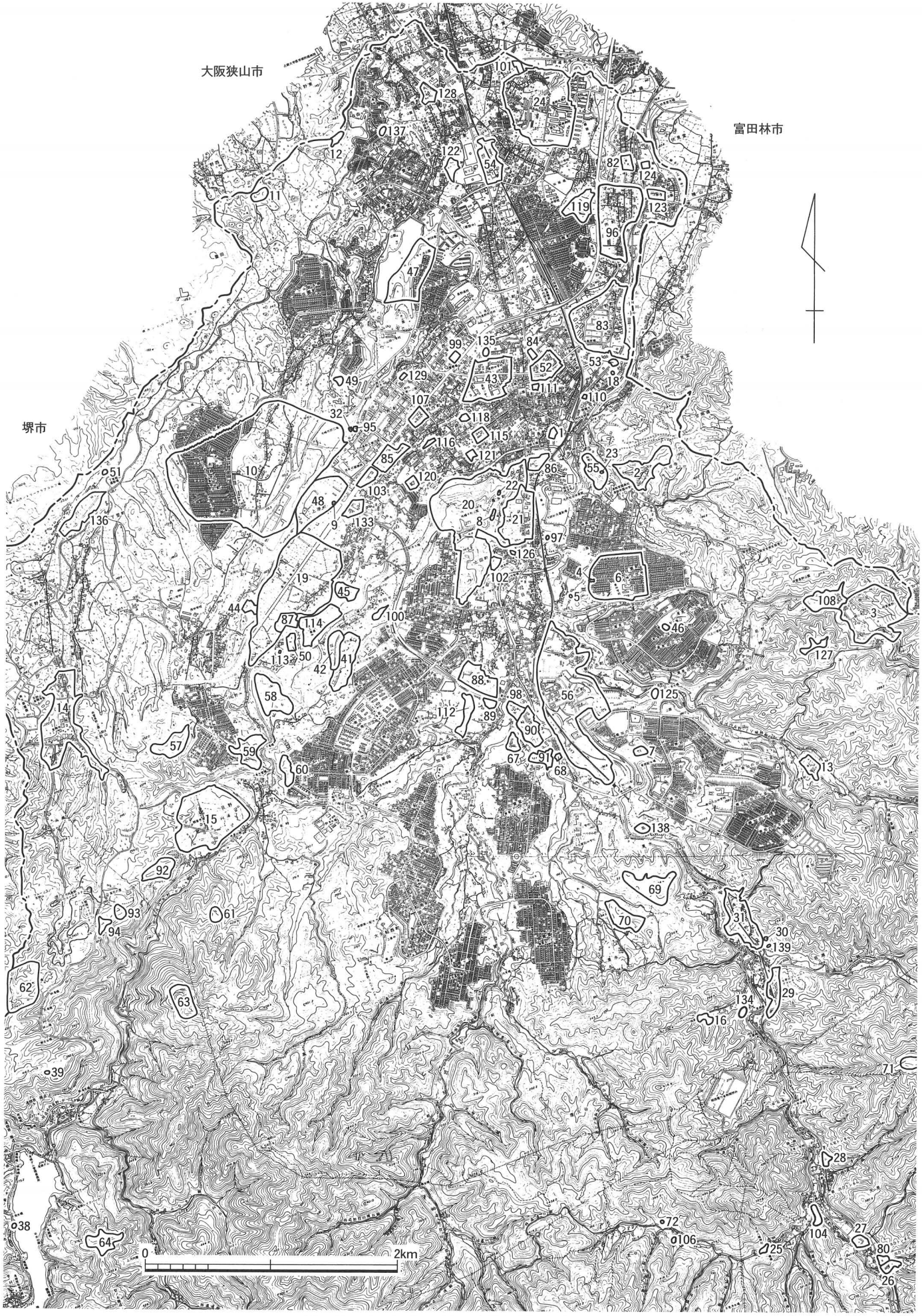
第１図　遺跡位置図

当該遺跡の北側は石川沿の中・低位段丘を中心に遺跡が展開しており、錦町遺跡、錦町北遺跡、野作遺跡、栄町遺跡、栄町南遺跡、栄町東遺跡、上原北遺跡、長野神社遺跡などが所在している。これらの遺跡から出土する遺構・遺物はいずれも中世のものが主体であり、古代以前の明確な遺構は希薄である。栄町南遺跡や錦町北遺跡からは中世の建物跡が検出されている。この地区の開発は主に中世以降に進められたようである。

当該遺跡の南側は天見川・加賀田川沿の中・低位段丘上及びその背後にある大阪層群によって形成される台地上に、三日市遺跡、小塩遺跡、西浦遺跡、加塩遺跡、尾崎遺跡、尾崎北遺跡、ジョウノマエ遺跡、加賀田神社遺跡、庚申堂遺跡が所在している。これらの遺跡では三日市遺跡で旧石器時代の遺物・弥生時代の遺構・遺物が出土している他、ジョウノマエ遺跡、加賀田神社遺跡、庚申堂遺跡をのぞいて、すべての遺跡から古墳時代～古代にかけての中世以前の遺構・遺物が検出されており、当該遺跡北部の石川沿の中・低位段丘より成立の年代がさかのぼるものが多いようである。また、これらの遺跡のうち中世の明確な遺構が検出されたものとして三日市遺跡、加賀田神社遺跡、ジョウノマエ遺跡がある。

当該遺跡の東側には南側へと続く天見川沿の中・低位段丘上に、高野街道が南北にはしっている他、喜多町遺跡、上田町遺跡、増福寺遺跡、上田町窯跡が所在している。この中・低位段丘よりさらに東に位置する金剛・葛城山系の西斜面にはかつて前方後円墳である大師山古墳が所在していた。現在では大師山遺跡、河合寺遺跡、河合寺城跡、大日寺遺跡、大師山南古墳が所在している。

当該遺跡の西側には、遺跡の北側から続く石川沿の中・低位段丘上に、上原遺跡、上原



第２図　河内長野市遺跡分布図（1/40000）

番号	文化財名称	種類	時代
1	長野神社遺跡	社寺	室町以降
2	河合寺遺跡	社寺	平安以降
3	観心寺遺跡	社寺	平安以降
4	大師山古墳	古墳	古墳（前期）
5	大師山南古墳	古墳？	古墳（後期）
6	大師山遺跡	集落・生産	弥生(後期)・平安
7	興禅寺遺跡	社寺	中世以降
8	烏帽子形八幡神社遺跡	社寺	室町以降
9	塚穴古墳	古墳・墳墓	古墳(後期)・近世
10	長池窯跡群	生産	平安～近世
11	小山田1号古墓	墳墓	奈良
12	小山田2号古墓	墳墓	奈良
13	延命寺遺跡	社寺	平安以降
14	天野山金剛寺遺跡	社寺・墳墓	平安以降
15	日野観音寺遺跡	社寺・生産	平安～中世
16	地蔵寺遺跡	社寺	中世以降
(17)	岩湧寺遺跡	社寺	平安以降
18	五ノ木古墳	古墳	古墳（後期）
19	高向遺跡	集落	旧石器～中世
20	烏帽子形城跡	城館・生産	中世～近世
21	喜多町遺跡	集落	縄文・古墳～中世
22	烏帽子形古墳	古墳	古墳（後期）
23	末広窯跡	生産	中世
24	塩谷遺跡	散布地	縄文～中世
25	流谷八幡神社	社寺	平安以降
26	蟹井淵南遺跡	散布地	中世
27	蟹井淵北遺跡	散布地	中世
28	天見駅北方遺跡	散布地	中世
29	千早口駅南遺跡	社寺	中世
30	岩瀬薬師寺遺跡	社寺	中世以降
31	清水遺跡	散布地	中世
32	伝「仲哀廟」古墳	古墳？	
(33)	堂村地蔵堂跡	社寺	近世
34	滝畑埋墓	墳墓	近世
(35)	中村阿弥陀堂跡	社寺	近世
(36)	東の村観音堂跡	社寺	近世
(37)	西の村観音堂跡	社寺	近世
38	清水阿弥陀堂跡	社寺	近世
39	滝尻弥勒堂跡	社寺	近世
(40)	宮の下内墓	墳墓	古墳
41	宮山古墳	古墳	古墳
42	宮山遺跡	集落	縄文・奈良
43	西代藩陣屋跡	散布地・城跡	飛鳥～奈良・江戸
44	上原町墓地	墳墓	近世
45	惣持寺跡	散布地・社寺	縄文・奈良・鎌倉
46	栗山遺跡	祭祀	中世～近世
47	寺ケ池遺跡	散布地	縄文
48	上原遺跡	散布地	旧石器～近世
49	住吉神社遺跡	社寺	近世以降
50	高向神社遺跡	社寺	中世以降
51	青が原神社遺跡	社寺	中世以降
52	膳所藩代官所跡	城館	江戸
53	双子塚古墳跡	古墳	古墳
54	菱子尻遺跡	散布地・社寺	縄文～近世
55	河合寺城跡	城館	中世
56	三日市遺跡	集落・古墳他	旧石器～近世
57	日の谷城跡	城館	中世
58	高木遺跡	散布地	縄文
59	汐の山城跡	城館	中世
60	峰山城跡	城館	中世
61	稲荷山城跡	城館	中世
62	国見城跡	城館	中世
63	旗蔵城跡	城館	中世
64	権現城跡	城館	中世
(65)	天神社遺跡	社寺	中世以降
(66)	葛城第15経塚	経塚	平安以降
67	加賀田神社遺跡	社寺	中世以降
68	庚申堂	社寺	近世以降
69	石仏城跡	城館	中世
70	佐近城跡	城館	中世

番号	文化財名称	種類	時代
71	旗尾城跡	城館	中世
72	葛城第16経塚	経塚	平安以降
(73)	葛城第18経塚	経塚	平安以降
(74)	葛城第19経塚	経塚	平安以降
(75)	笹尾塞	城館	中世
(76)	大沢塞	城館	中世
(77)	三国山経塚	経塚	平安以降
(78)	光滝寺	社寺	中世以降
(79)	猿子城跡	城館	中世
80	蟹井淵神社遺跡	社寺	中世以降
(81)	川上神社遺跡	社寺	中世以降
82	千代田神社遺跡	社寺	中世以降
83	向野遺跡	集落・生産	縄文・平安～近世
84	古野町遺跡	散布地	中世
85	上原北遺跡	集落	中世
86	大日寺遺跡	社寺・墳墓	弥生～中世
87	高向南遺跡	散布地	鎌倉
88	小塩遺跡	集落	縄文～奈良
89	加塩遺跡	集落	古墳（後期）
90	尾崎遺跡	集落	古墳～中世
91	ジョウノマエ遺跡	城館？	中世
92	仁王山城跡	城館	中世
93	タコラ城跡	城館	中世
94	岩立城跡	城館	中世
95	上原近世瓦窯	生産	近世
96	市町東遺跡	散布地	弥生・中世
97	上田町窯跡	生産	近世
98	尾崎北遺跡	集落	古墳～中世
99	西之山町遺跡	散布地	中世
100	野間里遺跡	集落	平安
101	鳴尾遺跡	散布地	中世
102	上田町遺跡	散布地	古墳・中世
103	上原中遺跡	散布地	古墳・中世
104	小野塚	墳墓	中世
(105)	葛城第17経塚	経塚	平安以降
106	薬師堂跡	社寺	中世以降
107	野作遺跡	集落	中世
108	寺元遺跡	集落・社寺	奈良・中世
(109)	鳩原遺跡	散布地	中世
110	法師塚古墳跡	古墳	古墳
111	山上講山古墳跡	古墳	古墳
112	西浦遺跡	集落	古墳・中世・近世
113	地福寺跡	社寺	近世
114	宮の下遺跡	集落	平安～中世
115	栄町遺跡	散布地	弥生・古墳・中世
116	錦町遺跡	散布地	中世
(117)	太井遺跡	散布地	縄文・中世
118	錦町北遺跡	集落	弥生・中世・近世
119	市町西遺跡	集落	縄文・中世
120	栄町南遺跡	集落	中世
121	栄町東遺跡	散布地	弥生・中世
122	楠町東遺跡	散布地	弥生
123	汐の宮町南遺跡	散布地	弥生・奈良
124	汐の宮町遺跡	散布地	中世
125	神ガ丘近世墓	墳墓	近世
126	増福寺	社寺	中世以降
127	三昧城遺跡	墳墓・城跡	中世・近世
128	松林寺遺跡	社寺	近世以降
129	昭栄町遺跡	散布地	中世
*130	東高野街道	街道	平安以降
*131	西高野街道	街道	平安以降
*132	高野街道	街道	平安以降
133	上原東遺跡	散布地	弥生・中世・近世
134	地蔵寺東方遺跡	墳墓	鎌倉
135	本多町北遺跡	散布地	中世
136	下里町遺跡	散布地	古墳・中世
137	あかしあ台遺跡	散布地	近世
138	岩瀬北遺跡	集落	中世
139	岩瀬近世墓地	墳墓	近世

（　）は地図範囲外　＊は街道につき地図上にプロットせず

第1表　河内長野市遺跡地名表

中遺跡、上原東遺跡、塚穴古墳、地福寺跡、高向遺跡、高向南遺跡、惣持寺跡、宮の下遺跡、高向神社遺跡、野間里遺跡、宮山古墳、宮山遺跡、高木遺跡、上原町墓地が所在している。

第2節　既往の調査

今回、調査の対象となった烏帽子形城跡は、公園整備事業や個人住宅の建築に伴い、今回までに数次にわたる発掘調査が行われている。

昭和60年度の調査(註1)では、城跡と考えられていた烏帽子形山の山頂部の測量調査と、城郭の北裾にあたる駐車場建設予定地が発掘調査された。発掘調査では中世土器や輸入銭が出土したものの遺構は検出されなかった。しかし、山頂部の測量調査では城の縄張りを復原するのに貴重な資料が得られた。

昭和63年度の調査(註2)では城郭の中心部と考えられる山頂部にトレンチ調査が行われ、主郭と考えられる場所から、礎石建物が検出された。また、遺物は陶磁器、土師質の土釜、瓦等が出土した。

平成元年度(註3)には烏帽子形山の東裾部で発掘調査が行われた。この際には、山城に関連する遺構は検出されず、かわって古墳時代～中世にかけての遺構が検出され喜多町遺跡と命名された。この調査で、東側における城の広がりと周辺部における築城以前の様相が明らかになった。

平成2年度に行われた発掘調査(註4)では、主郭の南東にある斜面地から中世の礎石建物、石垣、埋甕が検出された。

平成8年度には城の東裾部で発掘調査(註5)が行われ、平成元年度に検出された古墳時代の遺構と関連する遺構・遺物を検出した他、瓦器や近世の遺物が出土している。

第3節　調査に至る経緯

本次調査(EBS98－1)は河内長野市(担当地域振興部農林課、現農とみどりの整備課、以下、市という。)を事業主とする、烏帽子形公園整備事業に先立つ事前調査として行われた。平成9年、市は烏帽子形公園整備事業を計画するにあたり、河内長野市教育委員会(以下、市教委という。)と協議を行った。その結果、計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地である烏帽子形城跡にあたることから、発掘調査が必要であるとの見解を示した。その後、市は文化財保護法57条の3に基づく通知を大阪府教育委員会を経由して文化庁に行った。

平成10年3月31日、市は事前調査のために河内長野市遺跡調査会(以下、遺跡調査会と

第３図　既往の調査区位置図（1/5000）

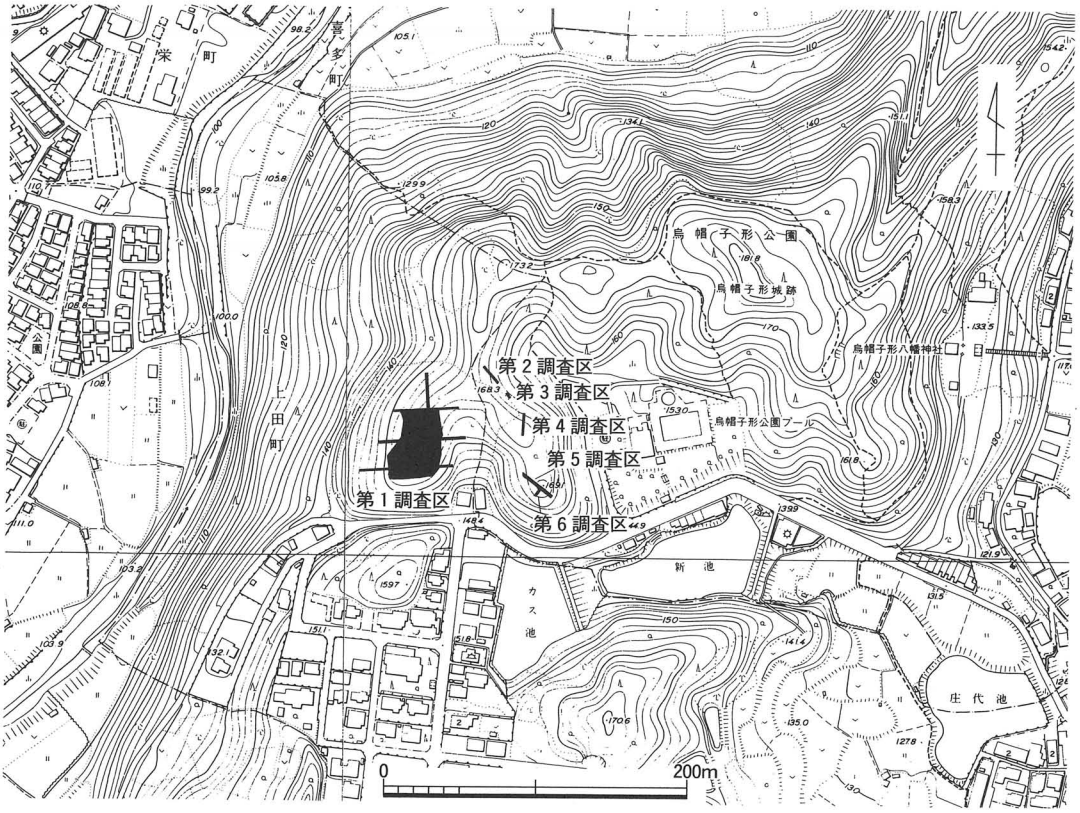
いう。)に発掘調査を依頼した。遺跡調査会は事業を受託し、平成10年５月15日に委託契約を締結し、市教委の指導のもとに発掘調査を開始した。発掘調査は平成10年５月18日から同年７月31日にかけて行われた。

平成11年５月13日、市と遺跡調査会は報告書刊行のための内業整理の契約を締結した。内業整理は同年５月14日から平成12年３月24日にかけて行われ、すべての業務を終了した。

第４節　調査の方法

烏帽子形城跡において今回調査の対象となった範囲は、昭和63年度の調査(註2)において主郭が検出されている箇所の南西約250mに位置する。調査地には南北に伸びる２条の尾根とこれらの間に形成された谷地形が存在する。発掘調査を行う以前は、調査地のすべてが竹林に覆われており、現状での地形の把握が困難な状況にあった。そこで平成10年５月18日から同年６月３日にかけて竹林の伐採作業を行った。伐採後の踏査の結果、尾根が東側のものと西側のものとでは形状が異なっており、東尾根が全体的に自然地形をとどめていると考えることができるのに対し、西尾根と谷筋には、人工的に造成された痕跡が認められた。また、谷筋と西尾根には近世・近代の遺物の散布が認められた。

そこで、遺物の散布が認められた西尾根と谷筋を対象として、現状での地形測量を行い、



第４図　調査区位置図（1/5000）

0.25m間隔で等高線を記録した地形図を作成した。地形図作成後、造成跡が城郭に伴うものであるか検討を行ったが、斜面の勾配が比較的緩やかであり、また高低差も大きくないことから、これが城郭の跡ではない可能性が強まった。

この後西尾根の稜線上に1本、この尾根の稜線に直交して3本、東尾根の稜線上に5本のトレンチを設定し、基盤層まで掘削した。西尾根に直交する3本のトレンチは谷筋まで延長し、土層の堆積状況や埋蔵文化財の有無が把握できるようにした。トレンチ調査では、北壁で土層を観察し、遺物の出土地点を記録した。この結果、東尾根では遺物が全く出土せず、人工的な盛土や切土の確認はできなかった。一方で、西尾根の頂上の平坦面では遺物が多く出土し、尾根の斜面で人工的な造成が確認できた。このような結果を受けて、全面的な発掘調査の対象を西尾根に絞り、これを第1調査区とし、造成面まで掘削を行った。第1調査区内では、5m間隔で区割りを行い遺物の取り上げを行った。また、土層の記録は先に設定したトレンチの北壁、東壁で行った。第1調査区では江戸時代の溝、土坑、柱穴等の遺構が検出できた。

東尾根に関してはトレンチの拡張等は行わず、設定したトレンチをそのまま、北からそれぞれ第2～第6調査区とした。遺構完掘後は航空測量を行い、7月20日にはすべての発掘業務を終えた。7月21日から7月31日までは主に実施報告書の作成を行い、発掘調査に伴うすべての業務を終了した。

（註1）『河内長野市埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』河内長野市教育委員会　1987年3月
（註2）『河内長野市遺跡調査会報Ⅰ』河内長野市遺跡調査会　1989年3月
（註3）『河内長野市遺跡調査会報Ⅱ』河内長野市遺跡調査会　1990年3月
（註4）『河内長野市埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』河内長野市教育委員会　1991年3月
（註5）『河内長野市埋蔵文化財調査報告書Ⅻ』河内長野市教育委員会　1997年3月

第２章　調査の結果

第１節　概要

今回の調査では、西尾根（第１調査区）において、近世後半期の人工的な造成の跡を検出でき、平坦に造成された尾根の頂上部および斜面のテラス面から、溝、道路状遺構、土坑、柱穴が検出されている。溝は造成された斜面の裾を巡っているものと、頂上部に掘削されているものに分けることができ、前者は曲線的に掘削されているのに対し、後者は直線的に掘削されているという平面形態における違いが認められた。遺物は主に近世のものが中心で包含層や造成面上から出土しており、遺構に伴うものは少なかった。

第２節　基本層序

基本層序は下層から基盤層、盛土、堆積土、表土に分かれる。基盤層も一層ではなく、花崗岩が風化してできたと考えられる5YR7/8橙色細砂もしくは10YR8/8黄橙色細砂と10YR8/1灰白色粘土が交互に水平に堆積したものである。盛土は、概ね平行に積まれており、上記の複数種の基盤層が混合した土が用いられていた。層序にはブロック状に他の土質の土を含んでいるものも見られた。堆積土はこの造成土が流出して堆積したものであり、盛土に使用された種々の土が混合した土質をしていた。表土は、地表面への有機物の堆積と土壌化によって形成されたものであり、5YR2/2黒褐色細砂混じり粘土であった。

第３節　地形

西尾根及び谷筋は人工的な造成により、段造成が行われていた。段は谷筋において４面、西尾根上に３面、西尾根の西斜面上に１面、合計で８面認められた。東尾根ではこのような造成面は認められなかった。谷筋にある平坦面は北側が南側より高くなっており、南から標高153m、155m、158m、160m付近にそれぞれ位置しており、面積はそれぞれ354㎡、130㎡、286㎡、85㎡となる。西尾根上のものは北側が南側より低くなっており、北から標高160m、162m、163m付近にそれぞれ位置しており、面積はそれぞれ275㎡、54㎡、510㎡となる。西尾根の西斜面のものは標高159m付近に位置しており、面積は341㎡となる。

造成に伴う盛土の状況は、西尾根に直交して設定したトレンチの内、最も南側で設定し

たものにおいて、良好に遺存していた。これによると、基盤層も切土され、造成されているようであり、頂上部が平坦に切土されている他、斜面地も階段状に切土されているようである。トレンチ内での観察であったためこの階段状の切土が平面的にどのような形態になるのか不明であるが、おそらくは盛土の崩落を防止する意味があったものと考えられる。この切土された基盤層上に盛土が行われていた。盛土は複数の単位に分層でき、これらは概ね水平に近い形で積まれているようであったが、地形の低い方へ向かって傾斜しているものも認められた。盛土の土質は基盤層のものに酷似しており、10㎤程度のブロックを含んでいるものが多く見られた。このような状況から、これが切土によって生じた土であると判断できた。盛土によって、頂上部の平坦面は７m程拡張されており、西側の斜面には幅10m程の平坦面が確保されていた。（第６・７図、図版３～５）

第４節　遺構と遺物

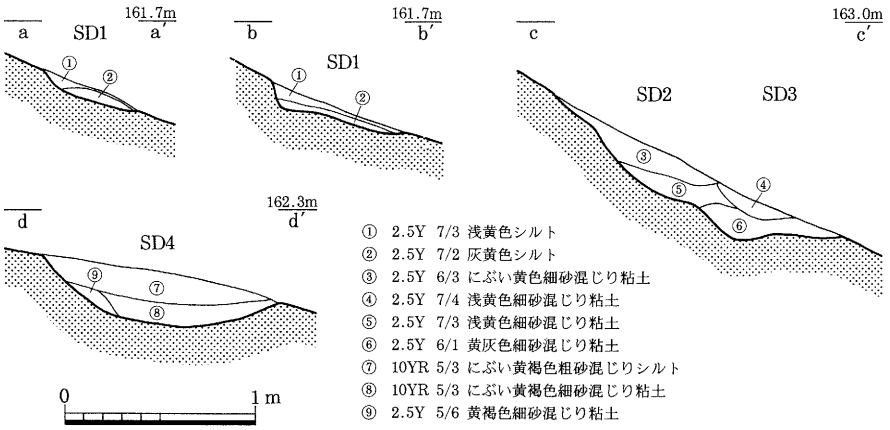
（１）　溝

［ＳＤ１～12］（第５・８図、付図２、図版６・10）

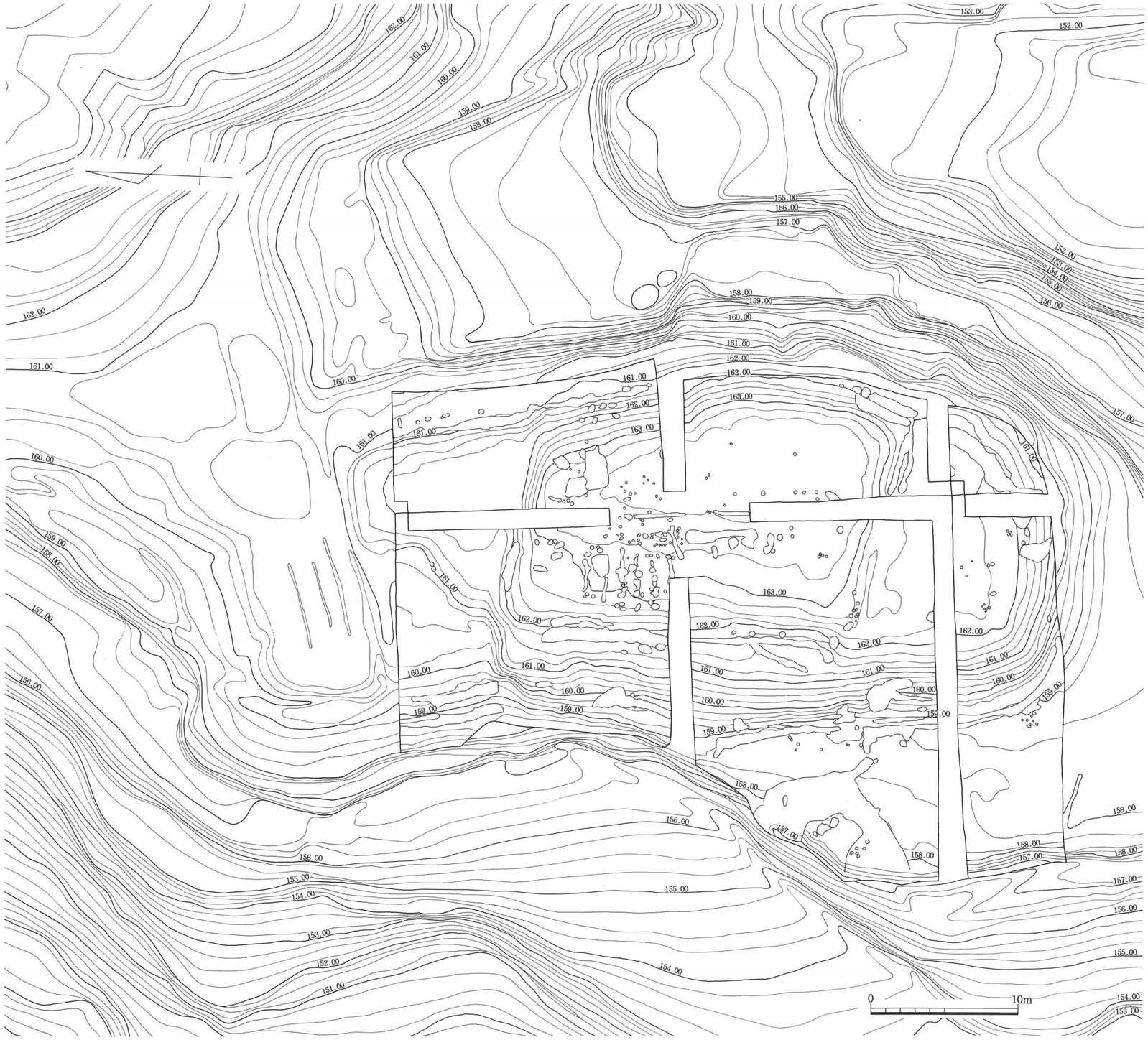
ＳＤ１～10は西尾根の稜線上に造成されている３面の平坦面に伴う斜面の裾を標高約159m～約161m付近で巡っている。溝は傾斜のきつい箇所でとぎれている。溝の平面形態は、楕円形をした斜面の裾部を巡ることから、多くが弧状を呈している。幅は0.2～１m、深さ0.1～0.2mの比較的浅いものである。農耕に伴う排水施設であると考えられる。

ＳＤ11・12はＳＤ１～10から派生してのびる溝である。

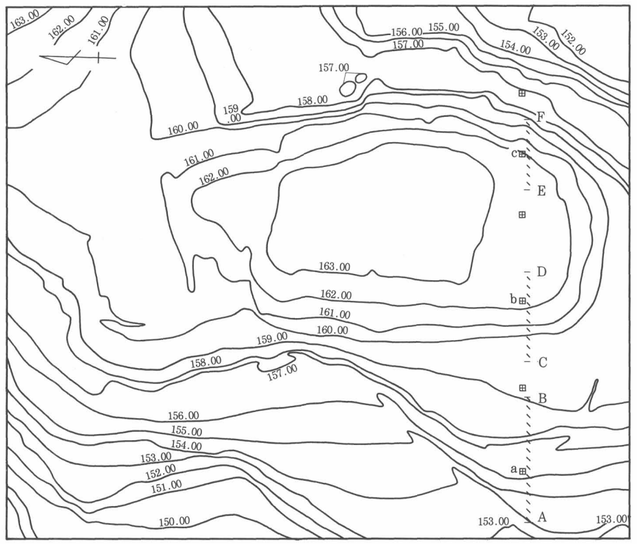
遺物はＳＤ２より陶器の土堝（３）、ＳＤ６より瀬戸新製焼の碗（２）が出土しているがいずれも破片である。ＳＤ11から肥前系陶磁の碗蓋（１）が出土した。碗蓋は内面に雷文が施されており、大橋編年のＶ期のものである。



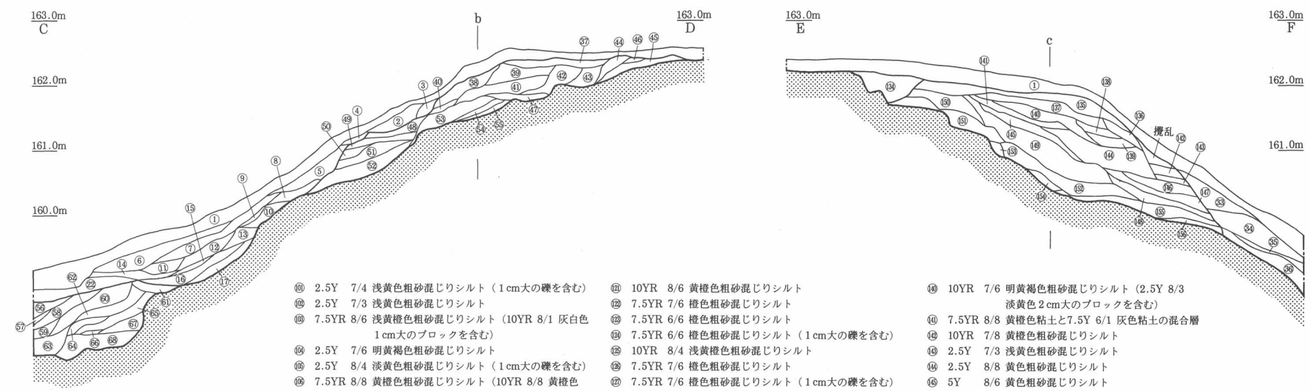
第５図　ＳＤ１～４遺構断面実測図（1/40）

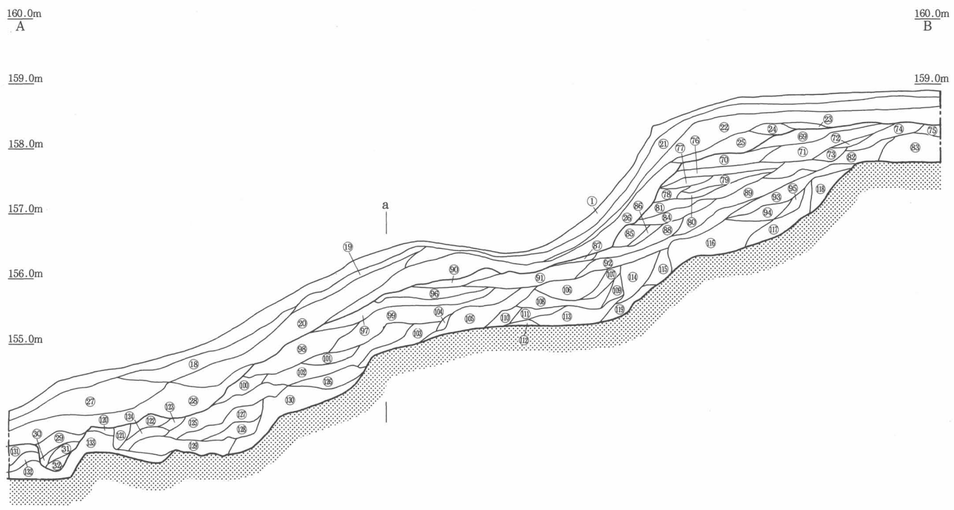


第６図　第１調査区地形図（1/300）



① 5YR 2/2 黒褐色細砂混じり粘土
② 2.5Y 8/3 淡黄色粗砂混じりシルト
③ 2.5Y 6/2 灰黄色粗砂混じりシルト
④ 7.5YR 8/3 浅黄橙色粗砂混じりシルト
⑤ 2.5Y 8/6 黄色粗砂混じりシルト
⑥ 2.5Y 8/8 黄色シルト
⑦ 10YR 6/3 にぶい黄橙色粗砂混じりシルト（10YR 5/3 にぶい黄褐色1cm大のブロックを含む）
⑧ 10YR 8/8 黄橙色シルト（10YR 8/1 灰白色2cm大のブロックを含む）
⑨ 10YR 8/6 黄橙色シルト（10YR 8/1 灰白色1cm大のブロックを含む）
⑩ 10YR 8/1 灰白色シルト
⑪ 7.5YR 4/2 灰褐色粗砂混じりシルトと10YR 8/6 黄橙色粗砂混じりシルトの混合層
⑫ 7.5YR 8/8 黄橙色粗砂混じりシルトと2.5Y 8/6 黄色粗砂混じりシルトの混合層
⑬ 10YR 8/1 灰白色シルトと10YR 8/8 黄橙色シルトの混合層
⑭ 5YR 6/1 褐灰色粗砂混じりシルト（5mm大の礫を含む）
⑮ 7.5YR 8/8 黄橙色粗砂混じりシルトと7.5Y 8/1 灰白色粗砂混じりシルトの混合層
⑯ 10YR 8/1 灰白色シルト
⑰ 10YR 8/4 浅黄橙色シルト
⑱ 10YR 8/3 浅黄橙色粗砂混じりシルト
⑲ 10YR 7/4 にぶい黄橙色粗砂混じりシルト
⑳ 2.5Y 7/4 浅黄色粗砂混じりシルト
㉑ 5YR 7/4 にぶい橙色細砂混じり粘土
㉒ 10YR 7/4 にぶい黄橙色細砂混じり粘土
㉓ 10YR 7/4 にぶい黄橙色粗砂混じりシルト
㉔ 10YR 7/3 にぶい黄橙色粗砂混じりシルト
㉕ 7.5YR 7/3 にぶい橙色粗砂混じりシルト
㉖ 2.5Y 7/3 浅黄色粗砂混じりシルト
㉗ 10YR 7/3 にぶい黄橙色粗砂混じりシルト
㉘ 2.5Y 7/3 浅黄色粗砂混じりシルト（㉖よりしまりがよい）
㉙ 7.5YR 7/4 にぶい橙色粗砂混じりシルト
㉚ 7.5YR 7/2 明褐灰色粗砂混じりシルト
㉛ 10YR 7/2 にぶい黄橙色粗砂混じりシルト
㉜ 10YR 8/4 浅黄橙色粗砂混じりシルト
㉝ 2.5YR 7/6 明黄橙色粗砂混じりシルト（5YR 5/6 明赤褐色1cm大のブロックを含む）
㉞ 2.5Y 6/3 にぶい黄色細砂混じり粘土
㉟ 10YR 6/4 にぶい黄橙色粗砂混じりシルト
㊱ 7.5YR 5/6 明褐色細砂混じりシルト（5～8mm大の礫を含む）
㊲ 7.5YR 8/1 灰白色シルト
㊳ 10YR 8/3 浅黄橙色粘土
㊴ 7.5Y 8/1 灰白色シルト
㊵ 7.5Y 8/1 灰白色シルト（7.5YR 8/4 浅黄橙色1cm大のブロックを含む）
㊶ 10YR 8/1 灰白色シルト（5YR 7/8 橙色1cm大のブロックを含む）
㊷ 10YR 8/3 浅黄橙色粗砂混じりシルト
㊸ 7.5YR 8/8 黄橙色シルト（7.5YR 8/2 灰白色ブロックを含む）
㊹ 7.5YR 8/2 灰白色シルト（7.5YR 8/8 黄橙色ブロックを含む）
㊺ 7.5YR 8/2 灰白色シルト
㊻ 7.5YR 7/8 黄橙色シルト
㊼ 10YR 8/4 浅黄橙色シルト
㊽ 7.5YR 8/8 黄橙色粘土（7.5YR 8/1 灰白色1cm大のブロックを含む）
㊾ 7.5YR 8/8 黄橙色粘土（7.5YR 8/1 灰白色2cm大のブロックを含む）
㊿ 7.5Y 8/1 灰白色粘土（10YR 8/8 黄橙色1cm大のブロックを含む）
(51) 7.5Y 8/1 灰白色粘土（7.5YR 8/8 黄橙色1cm大のブロックを含む）
(52) 7.5Y 8/1 灰白色粘土
(53) 7.5Y 8/2 灰白色粘土
(54) 2.5Y 8/2 灰白色粘土
(55) 7.5YR 8/6 浅黄橙色シルト
(56) 5YR 6/6 橙色粗砂混じりシルト
(57) 10YR 5/8 黄褐色粗砂混じりシルト
(58) 10YR 7/6 明黄褐色粗砂混じりシルト
(59) 2.5YR 7/2 灰黄色粗砂混じりシルト
(60) 2.5Y 8/4 淡黄色粗砂混じりシルト
(61) 2.5Y 8/8 黄色細砂混じり粘土（2.5Y 8/1 灰白色1cm大のブロックを含む）
(62) 7.5YR 8/3 浅黄橙色粗砂混じりシルト
(63) 10YR 8/3 浅黄橙色シルト
(64) 10YR 7/3 にぶい黄橙色粗砂混じりシルト
(65) 10YR 8/3 浅黄橙色粗砂混じりシルト
(66) 10YR 8/4 浅黄橙色シルト
(67) 7.5YR 8/6 浅黄橙色粗砂混じりシルト
(68) 10YR 8/4 浅黄橙色細砂混じり粘土
(69) 7.5YR 7/8 黄橙色粗砂混じりシルト（7.5YR 7/1 明褐灰色1cm大のシルトブロックを含む）
(70) 7.5YR 4/6 浅黄橙色粗砂混じりシルト（1cm大の礫を含む）
(71) 7.5YR 8/6 浅黄橙色粗砂混じりシルト（1～2cm大の礫を多く含む）
(72) 7.5YR 8/8 黄橙色粗砂混じりシルト
(73) 10YR 8/6 黄橙色細砂混じり粘土
(74) 7.5YR 8/8 黄橙色粗砂混じりシルト（7.5YR 8/1 灰白色1cm大のシルトブロックを含む）
(75) 10YR 7/6 明黄褐色粗砂混じりシルト（5YR 6/6 橙色1cm大のシルトブロックを含む）
(76) 7.5YR 7/4 にぶい橙色細砂混じり粘土
(77) 7.5YR 8/3 浅黄橙色粗砂混じりシルト
(78) 7.5YR 8/4 浅黄橙色粗砂混じりシルト
(79) 7.5YR 8/3 浅黄橙色細砂混じりシルト
(80) 7.5YR 8/3 浅黄橙色粗砂混じりシルト
(81) 2.5Y 7/3 浅黄色粗砂混じりシルト
(82) 7.5YR 6/8 橙色粗砂混じりシルト（7.5YR 8/1 灰白色1cm大のシルトブロックを含む）
(83) 10YR 6/8 明黄褐色粗砂混じりシルト（1cm大の礫を含む）
(84) 2.5Y 7/3 浅黄色粘土（7.5YR 7/1 明褐灰色ブロックを含む）
(85) 7.5YR 8/3 浅黄橙色粘土
(86) 7.5YR 8/4 浅黄橙色粘土
(87) 7.5YR 8/3 浅黄橙色粘土（7.5YR 7/1 明褐灰色ブロックを含む）
(88) 7.5YR 8/3 浅黄橙色粘土
(89) 7.5YR 7/4 にぶい橙色細砂混じり粘土
(90) 2.5Y 8/6 黄色細砂混じり粘土
(91) 10YR 8/6 黄橙色粗砂混じりシルト
(92) 7.5YR 8/3 浅黄橙色粗砂混じり粘土
(93) 2.5Y 7/4 浅黄色細砂混じり粘土
(94) 5YR 7/8 橙色細砂混じり粘土（10YR 8/6 黄橙色ブロックを含む）
(95) 10YR 8/6 黄橙色細砂混じり粘土
(96) 2.5Y 7/4 浅黄色粗砂混じりシルト
(97) 2.5Y 7/3 浅黄色粗砂混じりシルト
(98) 10YR 8/2 灰白色粗砂混じりシルト（5YR 7/8 橙色1cm大のブロックを含む）
(99) 2.5Y 6/6 明黄橙色粗砂混じりシルト
(100) 2.5Y 8/3 淡黄色粗砂混じりシルト

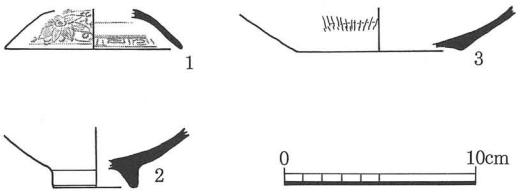




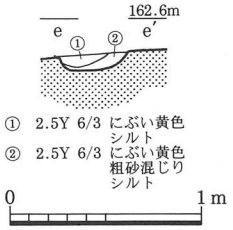
(101) 2.5Y 7/4 浅黄色粗砂混じりシルト（1cm大の礫を含む）
(102) 2.5Y 7/3 浅黄色粗砂混じりシルト
(103) 7.5YR 8/6 浅黄橙色粗砂混じりシルト（10YR 8/1 灰白色1cm大のブロックを含む）
(104) 2.5Y 7/6 明黄褐色粗砂混じりシルト
(105) 2.5Y 8/4 淡黄色粗砂混じりシルト（1cm大の礫を含む）
(106) 7.5YR 8/8 黄橙色粗砂混じりシルト（10YR 8/8 黄橙色1cm大のブロックを含む）
(107) 7.5YR 7/8 黄橙色細砂混じり粘土
(108) 2.5Y 8/6 黄色細砂混じり粘土
(109) 2.5Y 8/4 淡黄色細砂混じり粘土（10YR 8/8 黄橙色1cm大のブロックを含む）
(110) 7.5YR 7/6 橙色粗砂混じりシルト
(111) 2.5Y 8/4 淡黄色細砂混じり粘土
(112) 5Y 8/3 淡黄色細砂混じり粘土
(113) 7.5YR 7/6 橙色粗砂混じりシルト
(114) 7.5YR 8/8 黄橙色粗砂混じりシルト
(115) 7.5YR 7/4 にぶい橙色細砂混じり粘土
(116) 10YR 7/3 にぶい黄橙色細砂混じり粘土
(117) 10YR 7/4 にぶい黄橙色細砂混じり粘土
(118) 2.5Y 8/2 灰白色細砂混じり粘土
(119) 10YR 8/6 黄橙色細砂混じり粘土
(120) 7.5YR 7/4 にぶい橙色粗砂混じりシルト
(121) 10YR 8/6 黄橙色粗砂混じりシルト
(122) 7.5YR 7/6 橙色粗砂混じりシルト
(123) 7.5YR 6/6 橙色粗砂混じりシルト
(124) 7.5YR 6/6 橙色粗砂混じりシルト（1cm大の礫を含む）
(125) 10YR 8/4 浅黄橙色粗砂混じりシルト
(126) 7.5YR 7/6 橙色粗砂混じりシルト
(127) 7.5YR 7/6 橙色粗砂混じりシルト（1cm大の礫を含む）
(128) 7.5YR 7/6 黄橙色粗砂混じりシルト（1cm大の礫を含む）
(129) 7.5YR 7/8 黄橙色粗砂混じりシルト（1cm大の礫を含む）
(130) 2.5Y 8/6 黄色粗砂混じりシルト
(131) 10YR 8/3 浅黄橙色粗砂混じりシルト
(132) 10YR 6/6 明黄褐色粗砂混じりシルト
(133) 5YR 6/8 橙色細砂混じり粘土
(134) 10YR 5/3 にぶい黄褐色粗砂混じりシルト
(135) 2.5Y 8/6 黄色細砂混じり粘土
(136) 2.5Y 8/8 黄色シルト（2.5Y 8/3 淡黄色2cm大のブロックを含む）
(137) 2.5Y 8/8 黄色粗砂混じりシルト（7.5YR 8/6 浅黄橙色1cm大のブロックを含む）
(138) 10YR 8/8 黄橙色粗砂混じりシルト（2.5Y 8/3 淡黄色2cm大のブロックを含む）
(139) 7.5YR 8/8 黄橙色粗砂混じりシルト（2.5Y 8/3 淡黄色2cm大のブロックを含む）
(140) 10YR 7/6 明黄褐色粗砂混じりシルト（2.5Y 8/3 淡黄色2cm大のブロックを含む）
(141) 7.5YR 8/8 黄橙色粘土と7.5Y 6/1 灰色粘土の混合層
(142) 10YR 7/8 黄橙色粗砂混じりシルト
(143) 2.5Y 7/3 浅黄色粗砂混じりシルト
(144) 2.5Y 8/8 黄色粗砂混じりシルト
(145) 5Y 8/6 黄色粗砂混じりシルト
(146) 2.5Y 7/3 浅黄色粗砂混じりシルト（2.5Y 8/3 淡黄色1cm大のブロックを含む）
(147) 10YR 7/8 黄橙色粗砂混じりシルト
(148) 2.5Y 7/4 浅黄色細砂混じり粘土
(149) 2.5Y 8/8 黄色粗砂混じりシルト（2.5Y 8/1 灰白粘土と10YR 7/8 黄橙色5cm大のブロックを含む）
(150) 5Y 8/6 黄色細砂混じり粘土
(151) 2.5Y 8/6 黄色粗砂混じりシルト
(152) 5Y 8/3 淡黄色粗砂混じりシルト
(153) 2.5Y 8/1 灰白色シルト（7.5YR 8/8 黄橙色1cm大のブロックを含む）
(154) 2.5Y 8/1 灰白色シルト
(155) 2.5Y 6/3 にぶい黄色シルト
(156) 2.5Y 8/3 淡黄色シルト

0 5m

第7図　第1調査区土層断面実測図（1/80）



第８図　ＳＤ２・６・11出土遺物実測図



第９図　ＳＤ15遺構断面実測図（1/40）

［ＳＤ13～15］（第９図、付図２、図版６）

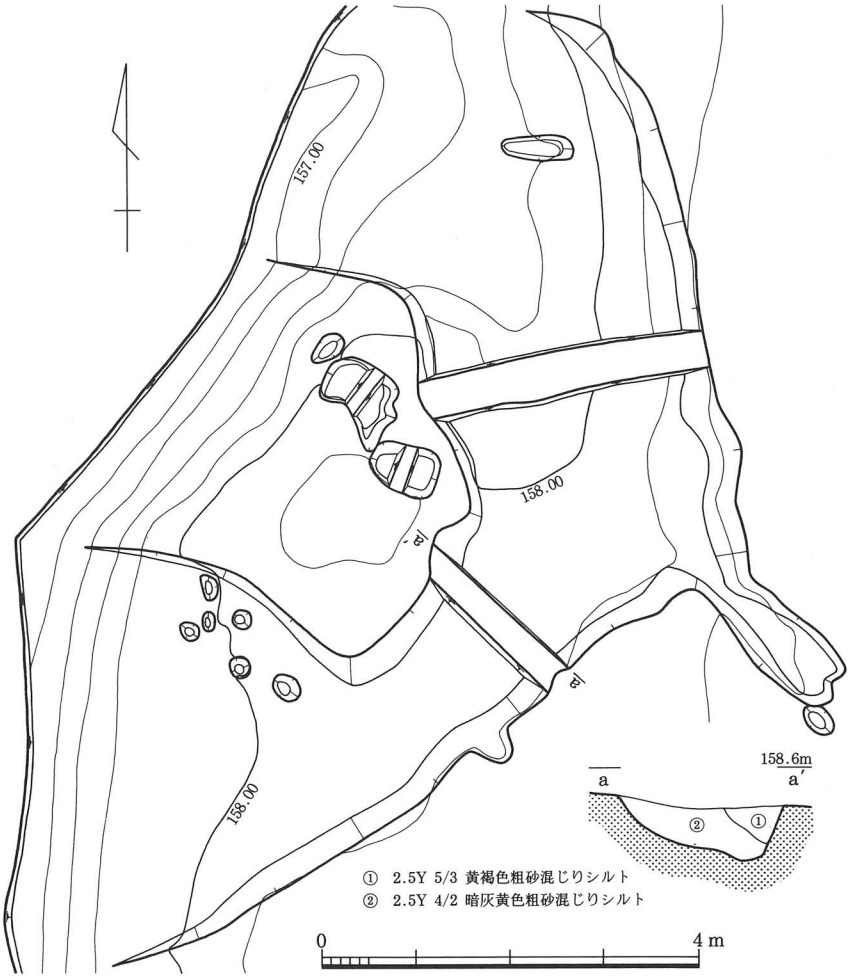
ＳＤ13～15は西尾根の稜線上に造成された平坦面上に掘削されている。これらはすべて直線的にのびており、幅0.2～２ｍ、深さ0.1～0.2mである。これらの溝も農耕に伴う排水施設であると考えられる。

遺物は出土しなかった。

（２）　道路状遺構

［ＳＦ１］（第10図、図版７）

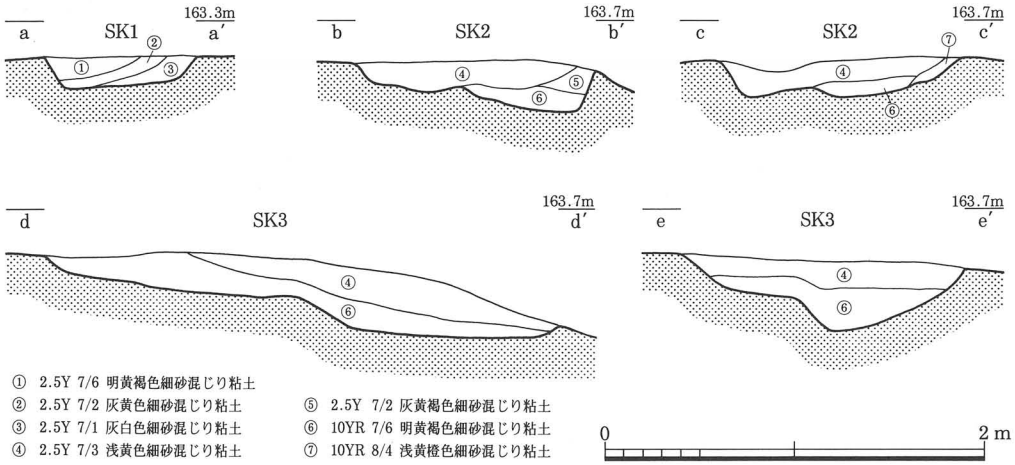
ＳＦ１は西尾根の西斜面に造成された平坦面で検出した。最大幅約３ｍ、深さは最も深



第10図　ＳＦ１遺構実測図（1/80）

い箇所で約0.5mであり、比較的幅の広く浅いものである。「C」字に屈曲しており、底はきつい勾配を有し、両端は西側に向かって下降している。またこの遺構は比較的なだらかな勾配を持つ斜面に接続していたことから頂上へむかう道路と考えられる。

（3） 土坑



第11図　ＳＫ１～３遺構断面実測図（1/40）

［ＳＫ１］（第11図、付図２）

ＳＫ１は西尾根頂上部に設定した第１調査区の北東部に位置する。平面形態は方形を呈しており、規模は長辺1.0m、短辺0.78m、深さ0.19mを測る。

遺物は出土しなかった。

［ＳＫ２］（第11図、付図２）

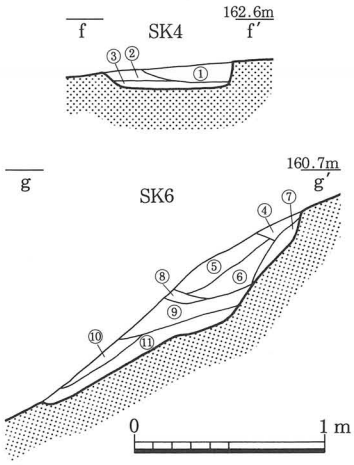
ＳＫ２はＳＫ１の西約0.5mの地点に位置する。平面形態は隅丸方形を呈しており、規模は長辺1.49m、短辺1.32m、深さ0.2mを測る。

遺物は出土しなかった。

［ＳＫ３］（第11図、付図２）

ＳＫ３はＳＫ２の南に隣接しており、ＳＫ２を切っている。平面形態は長方形を呈しており、規模は長辺2.68m、短辺1.7m、深さ0.38mを測る。

遺物は出土しなかった。



① 2.5Y 6/3 にぶい黄色粗砂混じりシルト
② 2.5Y 7/4 浅黄色細砂混じり粘土
③ 2.5Y 6/3 にぶい黄色細砂混じり粘土
④ 2.5Y 8/1 灰白色粗砂混じりシルト
⑤ 2.5Y 7/4 浅黄色粗砂混じりシルト
⑥ 2.5Y 8/6 黄色粗砂混じりシルト
⑦ 10YR 8/8 黄橙色シルト
⑧ 2.5Y 8/1 灰白色シルト
⑨ 5Y 8/3 淡黄色粗砂混じりシルト
⑩ 5Y 5/2 灰オリーブ色粗砂混じりシルト
⑪ 5Y 7/1 灰白色粗砂混じりシルト

第12図　ＳＫ４・６遺構断面実測図（1/40）

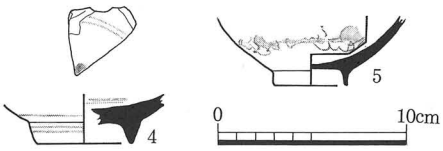
［ＳＫ４］（第12図、付図２）

ＳＫ４は第１調査区のほぼ中央に位置し、ＳＤ15の西に隣接する。平面形態は円形を呈しており、規模は径約0.7m、深さ0.13mを測る。

遺物は出土しなかった。

［ＳＫ５］（第13図、図版10）

ＳＫ５はＳＫ４の南東約７ｍの地点に位置する。検出規模は径約0.6ｍを測るが、完掘していないため全体的な形状や規模は不明である。



第13図　ＳＫ５出土遺物実測図

遺物は肥前系磁器の碗（４）、瀬戸の碗（５）が出土している。（４）は見込みに五弁花文が見られ、大橋編年のＶ期に相当するものである。遺物はいずれも小片であるため、流入によるものであると考えられる。

［ＳＫ６］（第12図、付図２）

ＳＫ６は第１調査区の南西部に位置している。平面形態は楕円形を呈しており、南方向に向かって幅約0.3ｍの溝がのびている。規模は長径3.29ｍ、短径1.78ｍ、深さ0.38ｍを測る。

遺物は出土しなかった。

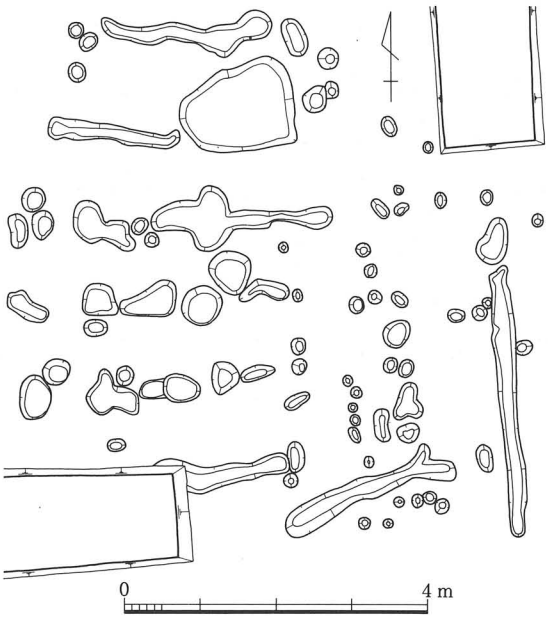
［ＳＫ７］

ＳＫ７は第１調査区の南端に位置している。平面形態は楕円形を呈している。規模は長径1.97ｍ、短径1.28ｍ、深さ0.15ｍを測る。

遺物は出土しなかった。

（４）　柱穴群（第14図、図版７）

第１調査区の北半部のほぼ中央で、柱穴群を検出した。柱穴は径0.5～１ｍ程度の大型のものと径0.1～0.2ｍ程度の小型のものがある。この場所に簡単な作りの作業小屋のようなものがあったのであろう。



第14図　柱穴群平面図（1/100）

（５）　包含層（第15・16図、図版10）

今回の調査において包含層から出土した遺物は、すべて17世紀以降のものである。遺物にはミニチュア土製品、土師質土器、堺擂鉢、肥前系陶磁器、瀬戸新製焼の陶磁器、寛永通宝等が出土しており、中世城郭に伴うと見られる遺物は出土しなかった。以下に図示が可能であった遺物の報告を行う。

土師質炮烙　(40・41)は炮烙である。口縁部径は(40)が27㎝で、(41)が35㎝を測る。ともに難波分類のＦ類に相当する18世紀後半のものである。

堺擂鉢　(42・43)は堺擂鉢である。口縁部径は(42)が19㎝、(43)が34㎝を測る。白神分類で(42)がII類、(43)がI類となる。ともに18世紀後半のものである。

甕　(44)は陶器の甕である。口縁部径は35㎝を測る。

紅猪口　(6・7)は肥前系陶磁器の菊花形紅猪口である。口縁部径は(6)が4.6㎝、(7)が4.7㎝を測る。

仏飯具　(36)は仏飯具である。残器高は4.2㎝、台底径は4㎝を測る。

灯明台　(37)は灯明台である。残器高は3.8㎝、台底径は3.5㎝を測る。

坏　(8～10)は瀬戸新製焼の坏である。口縁部径は(8)が6㎝、(9)は8.2㎝を測る。(9)の外面には福寿文が認められる。(10)は残器高2.75㎝、高台径2.6㎝を測る。

皿　(23～29)は磁器の皿である。(24～28)は肥前系磁器である。(24・25)は見込みに五弁花文が施されている。大橋編年のⅣ期に相当すると考えられる。その他のものは瀬戸新製焼と考えられる。

碗　(13～22)は磁器の碗である。多くが底部の破片であるため口縁部径は不明である。(14・15・21)は肥前系磁器であり、いわゆる「くらわんか茶碗」である。(15)は外面に花草文が認められ、大橋編年のⅣ期に相当する遺物である。他は瀬戸新製焼である。(19)は広東碗である。

小碗蓋　(11・12)は肥前系磁器の小碗蓋である。口縁部径は(11)が8.8㎝、(12)が9.8㎝を測る。(11)は口縁部内面に雷文が認められる。(12)は口縁部内面に四方襷文が認められる。

堝蓋　(33)は陶磁器の蓋である。口縁部径16㎝、残存器高3.15㎝を測る。

土鍋　(34)は土鍋の底部である。残存器高3.3㎝、底径7.7㎝を測る。

小壺　(35)は小壺である。残存器高2.45㎝、高台径3.9㎝、高台高0.7㎝を測る。

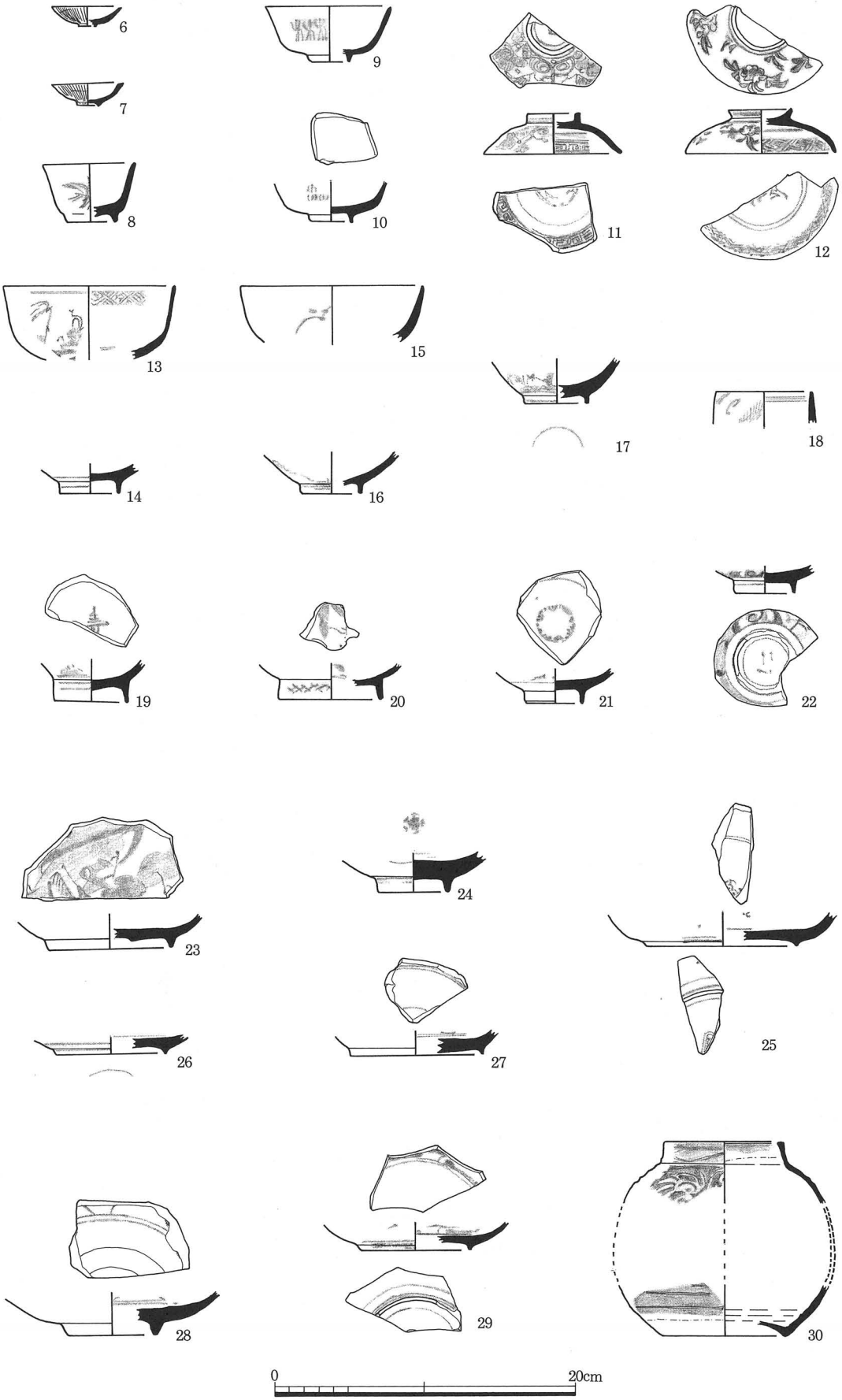
壺　(30)は陶器の壺である。口縁部径7.8㎝、復原器高13㎝を測る。

七厘　(38)は七厘のさなである。推定径9.6㎝、器高1.2㎝を測る。

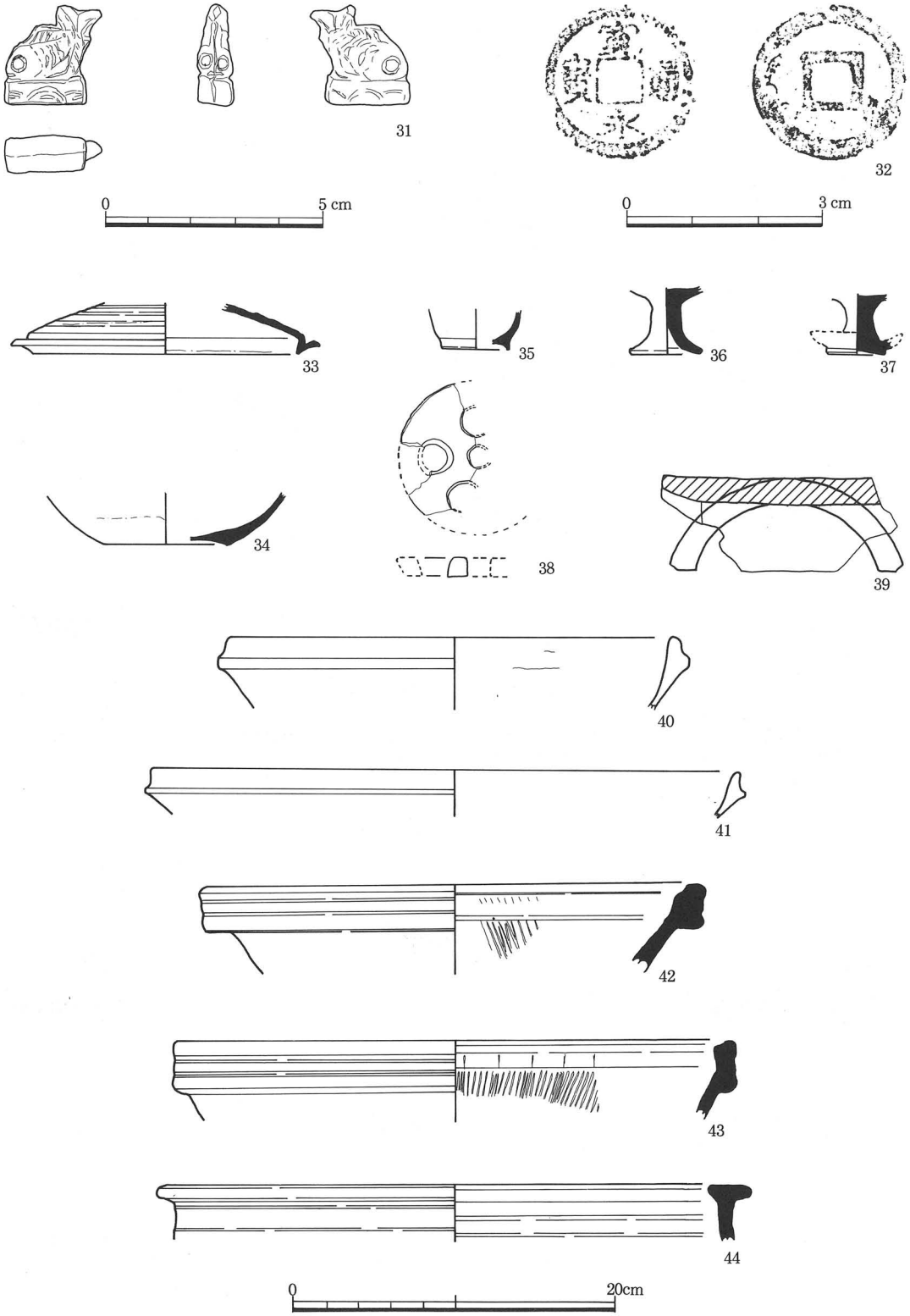
ミニチュア土製品　(31)は鯛人形である。合わせ型成形により製作されている。全長2.25㎝、高さ2.4㎝を測る。

寛永通宝　(32)は寛永通宝である。直径2.5㎝、厚さ0.1㎝を測る。

瓦　(39)は丸瓦である。残存長16.5㎝、幅14.25㎝、厚さ1.7㎝を測る。



第15図　第１調査区包含層出土遺物実測図（１）



第16図　第１調査区包含層出土遺物実測図（２）

第5節　まとめ

今回の調査において、中世城郭烏帽子形城に関連する遺構・遺物は確認されず、烏帽子形城廃城後の17世紀後半から18世紀にわたる遺構・遺物が検出された。しかしながら、今回の調査で烏帽子形城の範囲について、その西限に関する新知見を得ることができた。烏帽子形城の主郭から南西方向約200mにあたる西ノ段は従来から城を区画する機能を持つ可能性が指摘されていた。今回の調査地点はこの箇所よりさらに西にあたる。

また、今回の調査区で、近世の耕作地とそれに伴う造成跡が検出できたことは次のような意義を持つと考える。まず、確実に中世城郭に伴うと考えられる遺構の西限は主郭から南西約200mの地点に位置する西ノ段と呼ばれる郭群である。西ノ段は幅約10m、長さ15mにわたり続いている。今回の調査地はこの西ノ段の西に位置し、かつ中世城郭にともなう遺構は検出できていない。このようなことから中世城郭の西限は、西ノ段にとどまることが考えられる。しかし、当該調査地では廃城後の土地造成が認められた。また本次調査と同時期の遺構が城郭の東側でも検出されている。このような事から、廃城後、近世になって城郭の周囲が開発されてきたことが分かった意義は大きい。

図　　版

図版1　遺構

第１調査区調査前景（北から）

第１調査区北部調査前景（北から）

第１調査区調査前景（南から）

第１調査区南西部調査前景（南から）

図版3　遺構

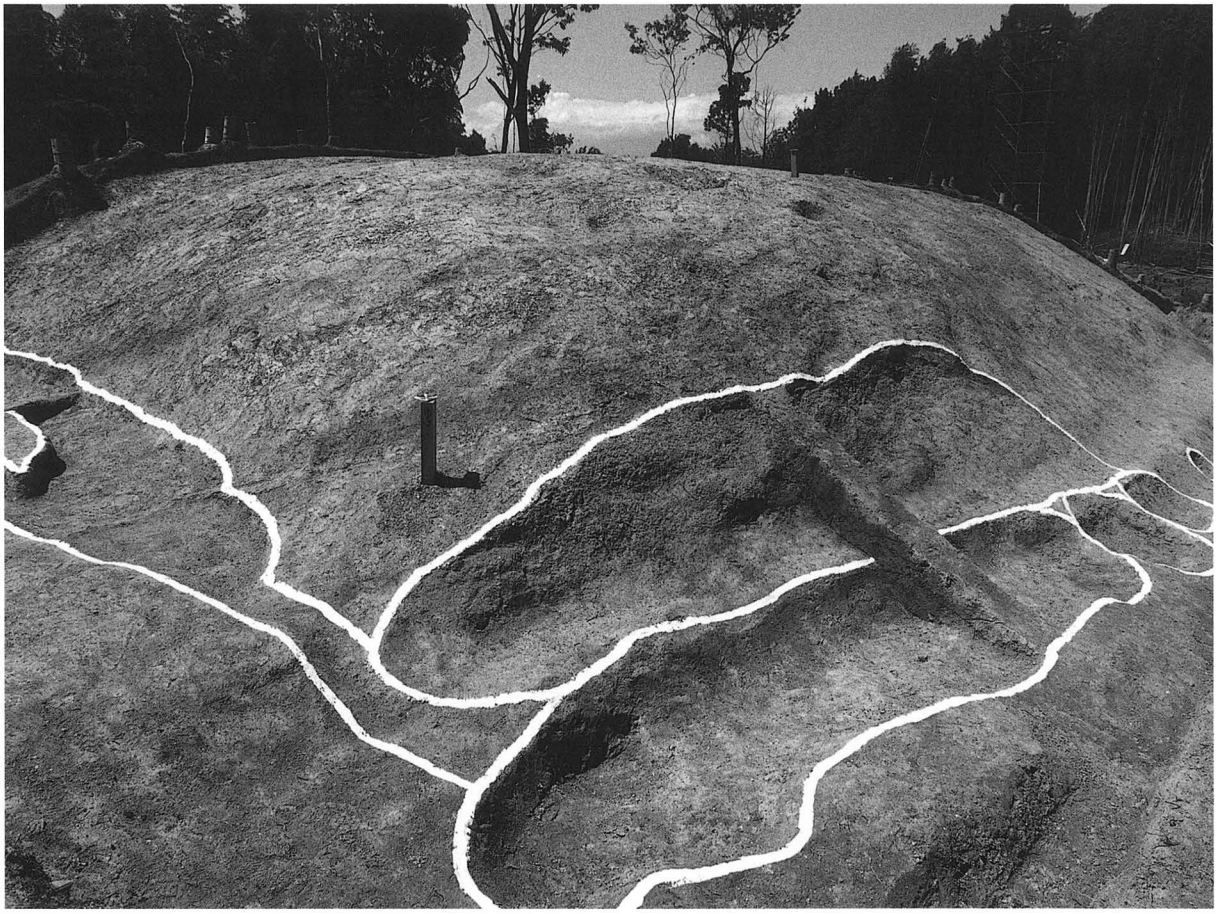
第１調査区全景（上から）

第１調査区全景（北から）

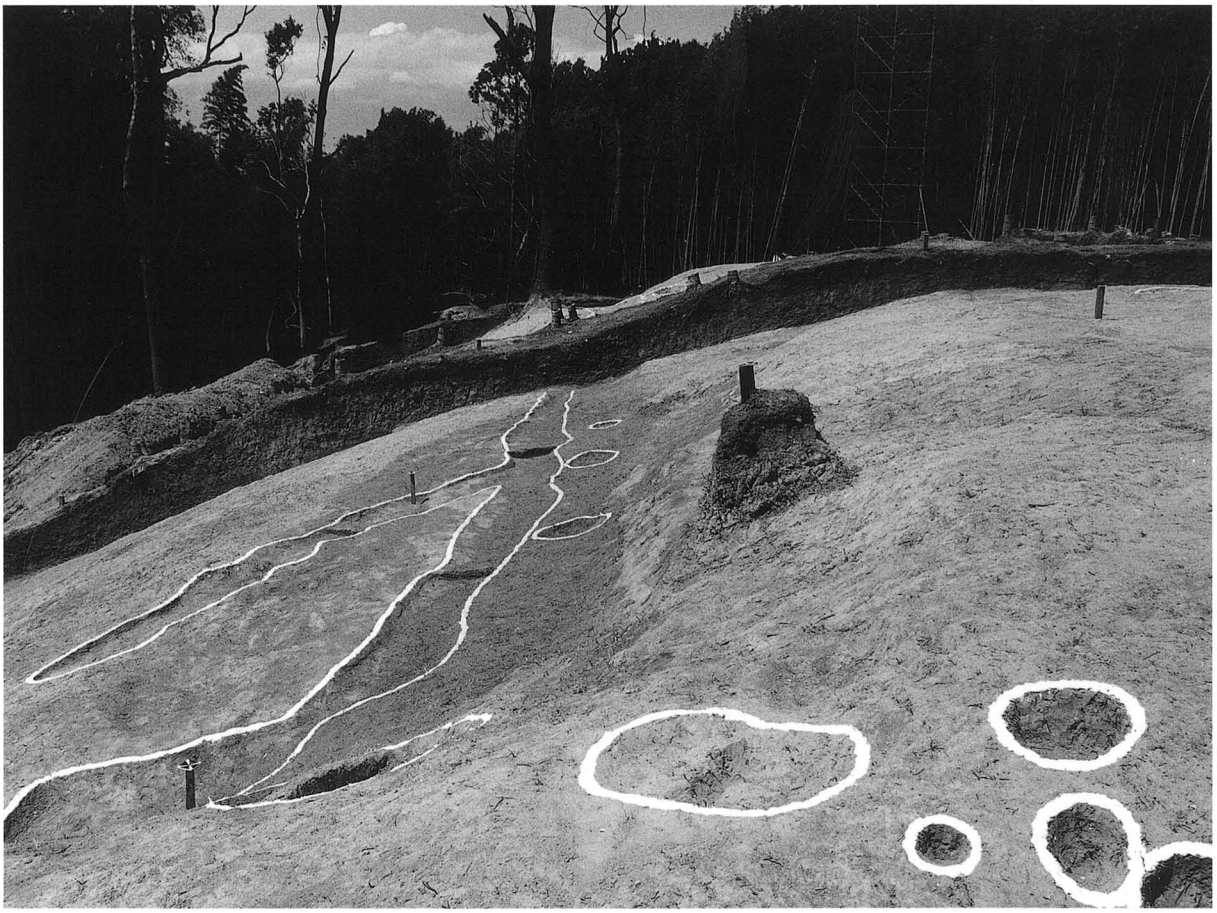
第１調査区全景（南から）

第１調査区西斜面（南から）

第１調査区全景（北から）



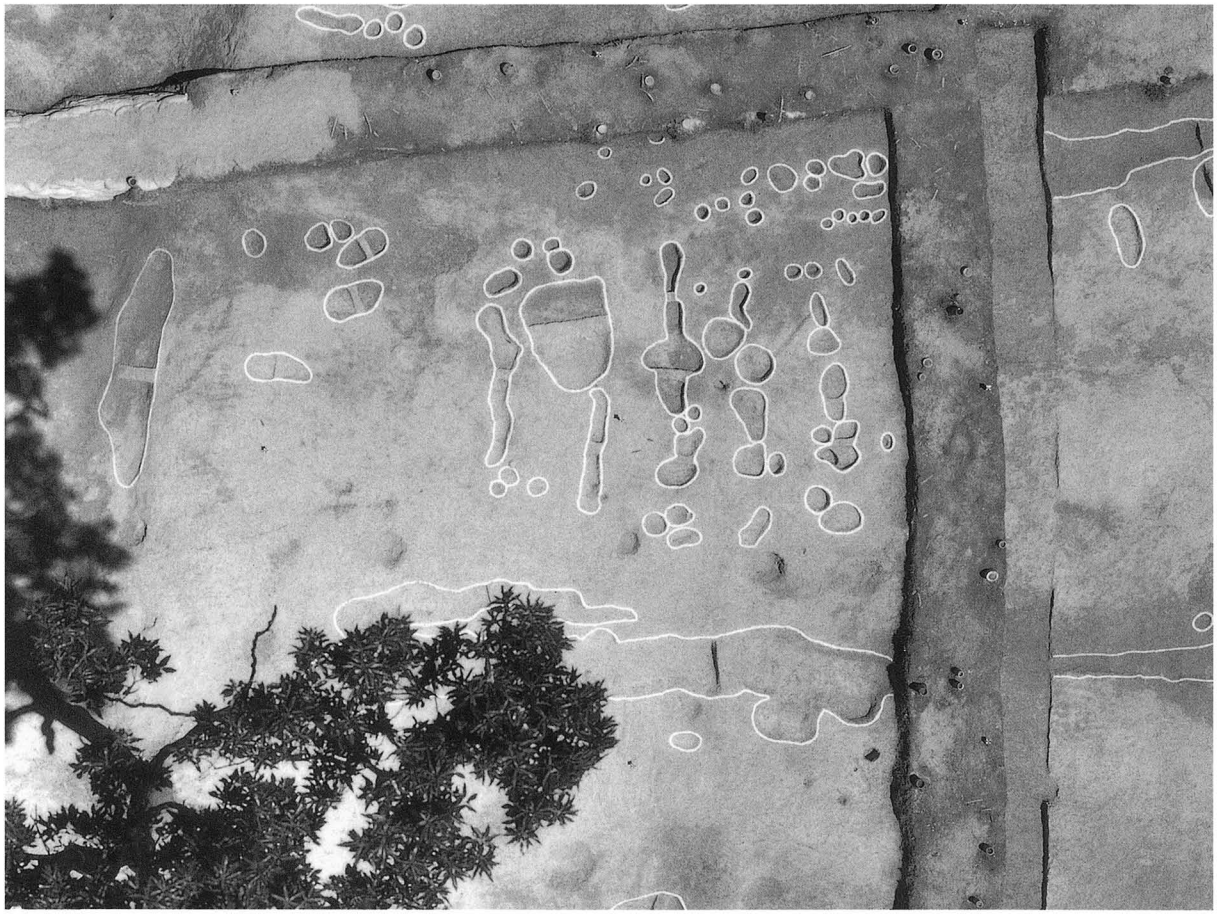
ＳＤ２・３（南から）



ＳＤ14（南から）

図版7　遺構

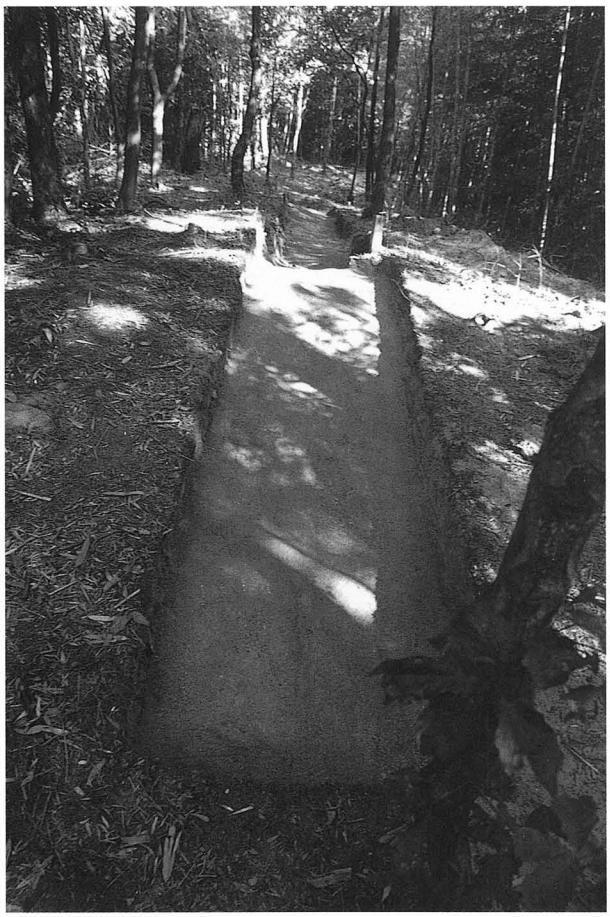
ＳＦ１（上から）



柱穴群（上から）

図版8　遺構

第2調査区（北から）



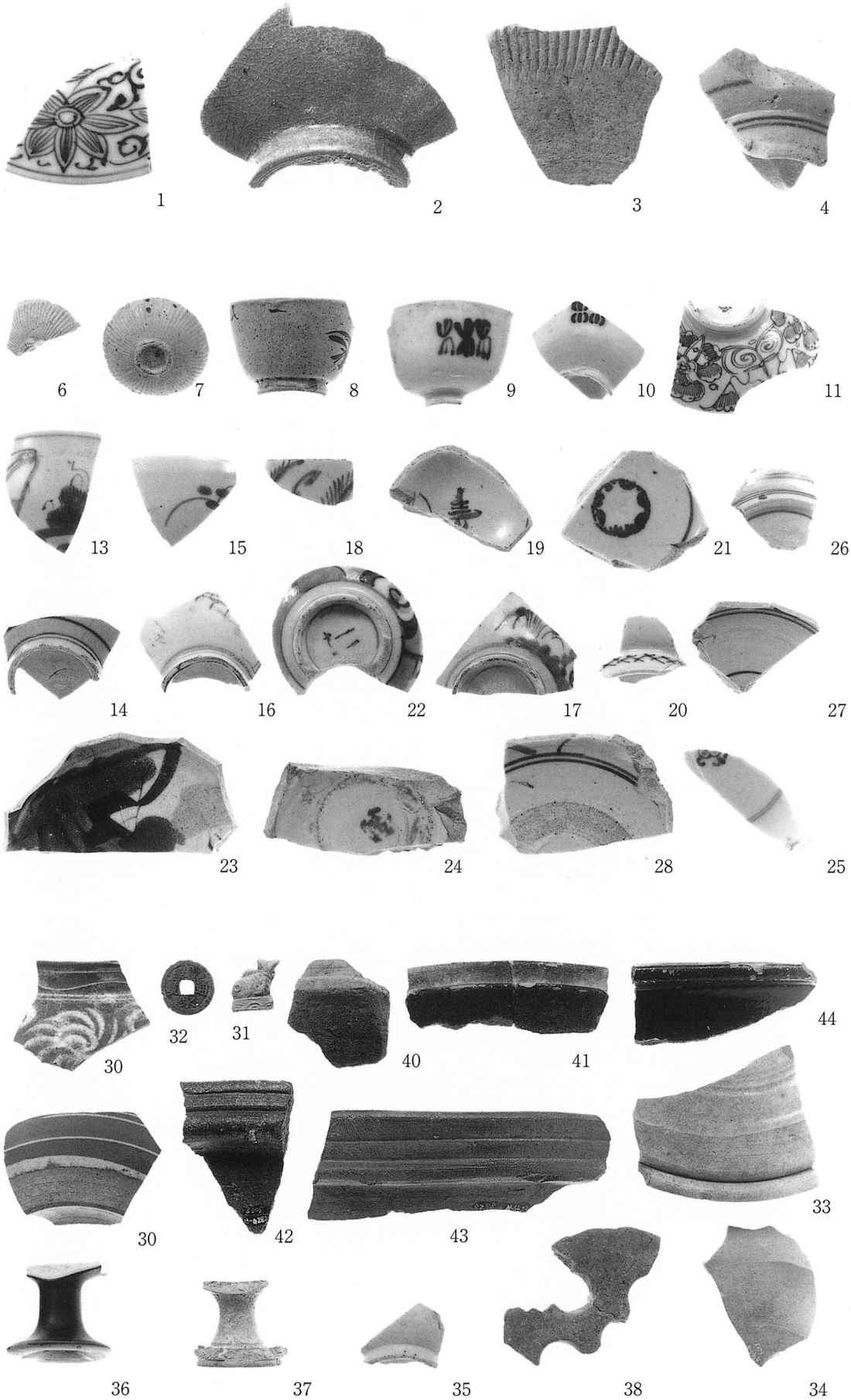
第4調査区（北から）

第3調査区（北から）

図版9　遺構

第５調査区（東から）

第６調査区（西から）



ＳＤ２（３）、ＳＤ６（２）、ＳＤ11（１）、ＳＫ５（４）、包含層（６～11、13～28、30～38、40～44）

報　告　書　抄　録

ふりがな	えぼしがたじょうあと
書　　名	烏帽子形城跡
副　書　名	河内長野市遺跡調査会報　XXⅢ
シリーズ名	河内長野市遺跡調査会報
シリーズ番号	XXⅢ
編著者名	尾谷雅彦　鳥羽正剛　太田宏明
編集機関	河内長野市遺跡調査会
所　在　地	〒586－8501 大阪府河内長野市原町396－3　TEL 0721-53-1111
発行年月日	2000年3月31日

所収遺跡名	所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
烏帽子形城跡（えぼしがたじょうあと）	大阪府河内長野市上田町（おおさかふかわちながのし うえだちょう）	27216	府24 河20	34° 26′ 25″	135° 33′ 57″	1998.5.18 ～ 1998.7.31	2,000m²	公園整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
烏帽子形城跡	生産	近世	溝 土坑	肥前系磁器	

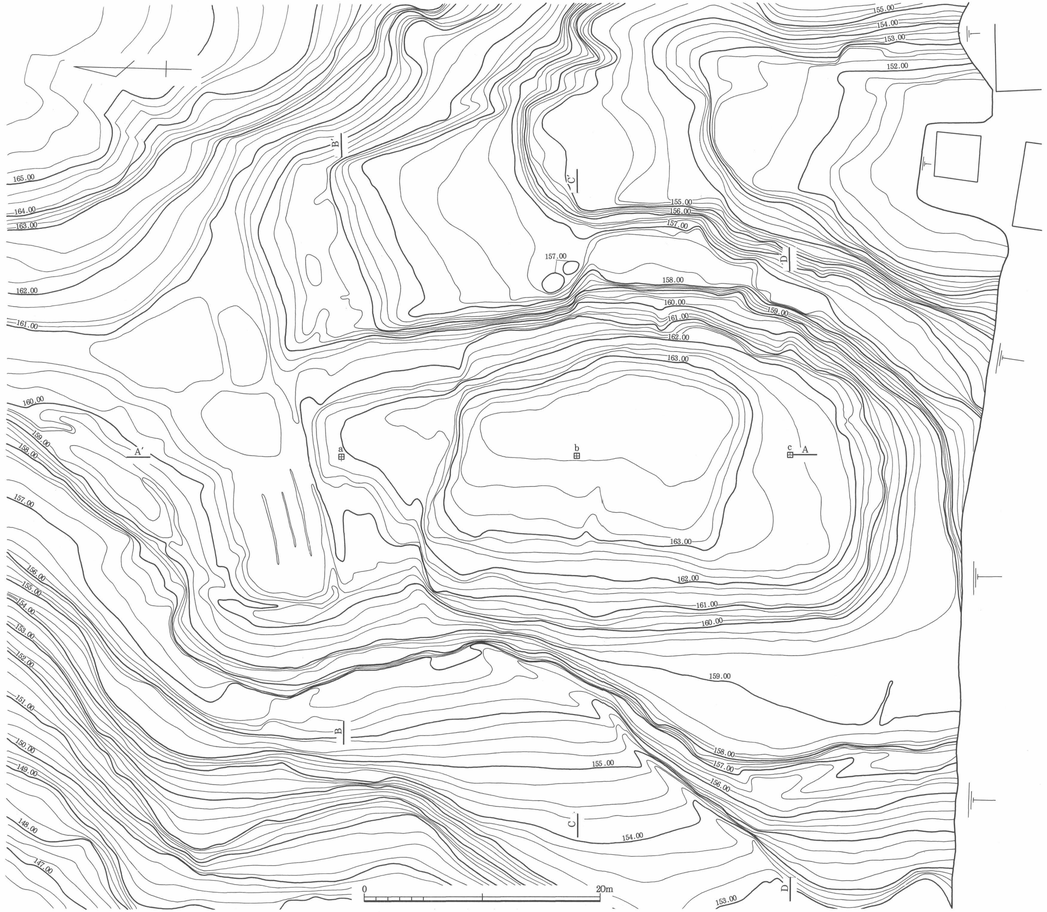
河内長野市遺跡調査会報 XXⅢ

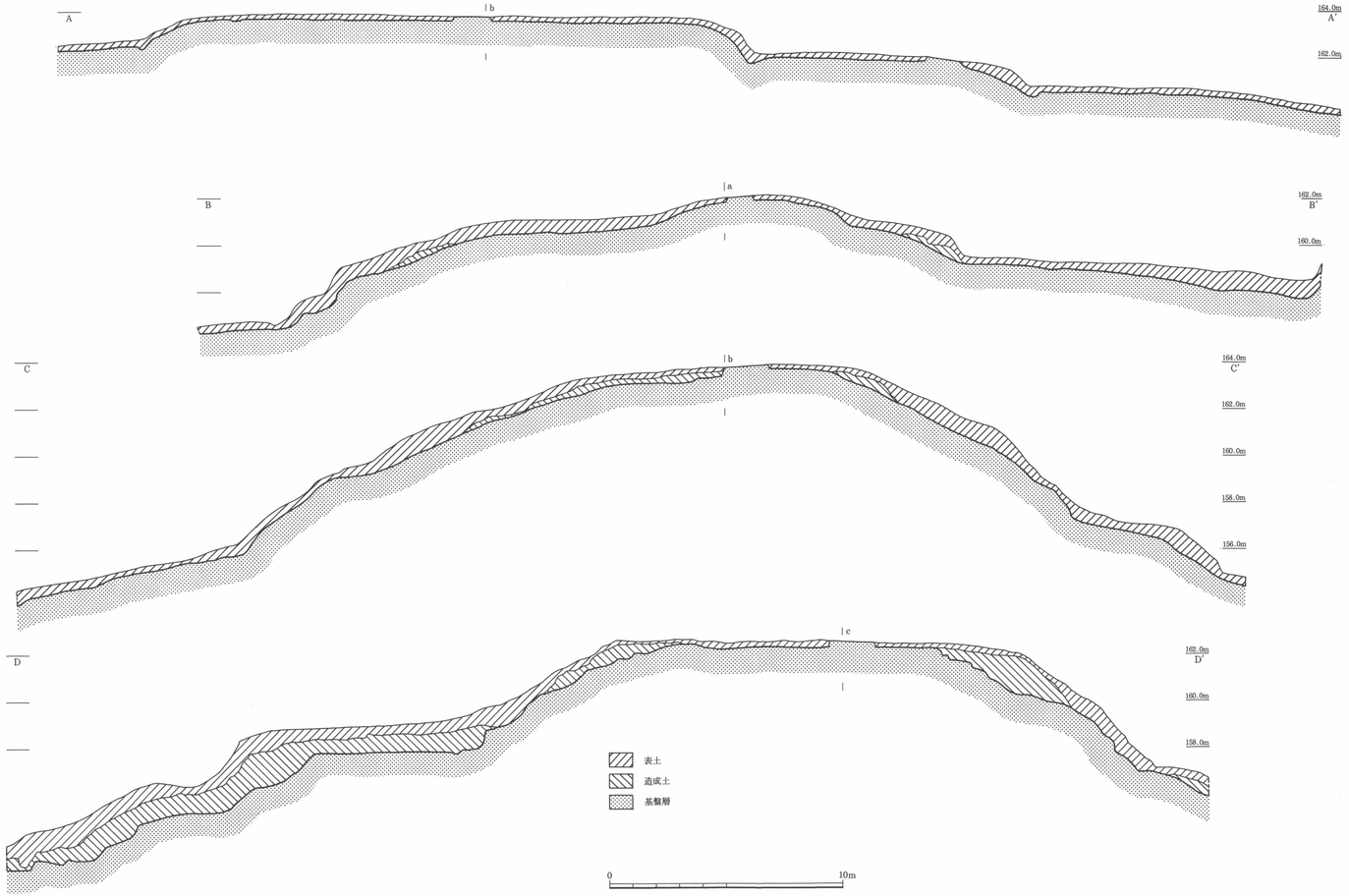
烏帽子形城跡

2000年3月31日発行

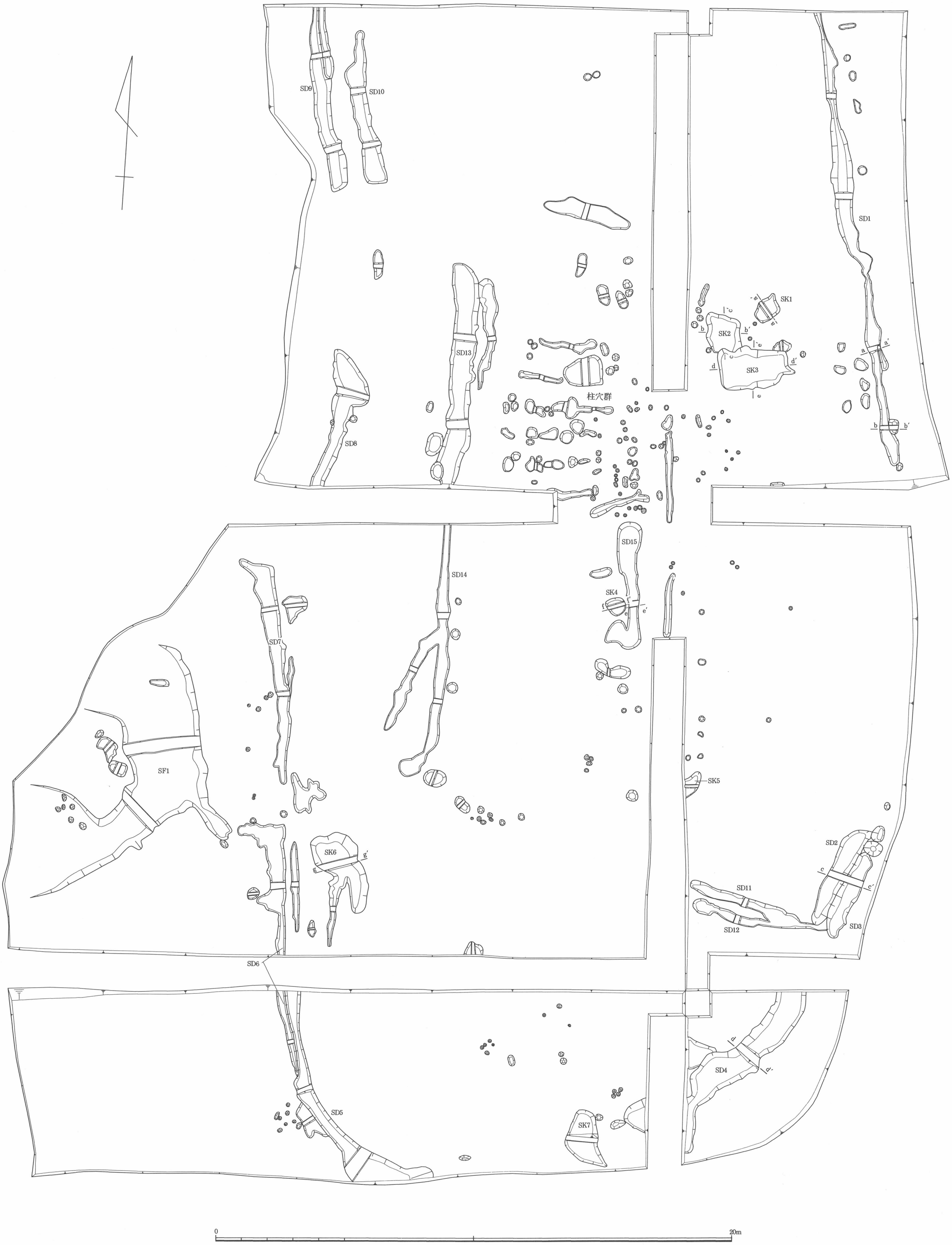
発　行　大阪府河内長野市原町396－3
河内長野市遺跡調査会
0721－53－1111

印　刷　㈱中島弘文堂印刷所





付図１　第１調査区地形図（1/300・1/150）



付図２　第１調査区遺構配置図（1/100）